

中国の音楽科教員養成課程における教育実習に関する研究(1)

——A師範大学音楽学院の教育実習生に対する質問紙調査を中心として——

王 曉 玲

(本講座大学院博士課程後期在学)

1. はじめに

中国では、1958年－1960年にかけて「教育文化大革命」が行われ、旧ソ連の音楽科教員養成教育にみられる教条主義を批判し、理論より実践を重視した¹⁾。このことは、音楽科教員養成課程に大きな影響を及ぼした。当時の多くの師範大学音楽科教員養成課程では、「音楽科教員を養成する」という目標から、音楽大学の目標である「音楽専門家を養成する」という目標への変更を行い²⁾、そのカリキュラムも音楽大学のカリキュラムを模倣したものとなった。そこで、大学の教師をはじめとして学生までもが、音楽技能と理論に関する科目を重視し、教職専門科目を軽視した。

80年代後半から、子どもたちの学習の負担を減らし、知識、技能の学習よりも生涯学習を目指して、自ら考え自ら学び、実践力、創造力などの全面的な発達を重視する「素質教育」という新しい教育理念が大に提唱されてきた。小・中学校の音楽科教育でも新しい理念に基づいて、改革が行われ始めた。小・中学校の音楽科教育の改革に伴って、以前の「音楽専門家を養成する」という養成目標とカリキュラムで養成された音楽科教員が、教育現場での応用能力、教職能力、教授に対する研究能力と意欲に乏しいと多く指摘された³⁾。音楽科教員は、音楽のすぐれた演奏能力のみならず、授業実践、児童・生徒との関わり、及び学校音楽活動で生じた様々な問題に柔軟、かつ臨機応変に対処できる「実践的指導力」が最も重要である、との認識が強まっている。

大学における養成段階での教育実習は、実際の教育現場における実践経験を経て、実践的指導力の基礎を培う上で、極めて重要な教育的役割を担っているといえる。1978年－2005年の中国における音楽科教員養成の教育実習に関する先行研究⁴⁾を概観すると、その動向は大きく5点に分けられる。第1は、教育実習の政策に関して研究したもの(板俊栄 2005、彭時代ら 2001等)、第2は、事前事後及び実習過程における大学教師と実習学校指導教諭の指導方法を研究したもの(張恵玉 2004、蔡覚民 1993)、第3は、大学カリキュラムとしての音楽科教育実習の改善を研究したもの(裴芳 2002、張莹 2004等)、第4は、音楽科教育実習の成果と課題を研究したもの(許洪帥 2002、蔡夢 1999等)、第5は、教育実習が音楽科教員養成課程における位置づけを研究したもの(金偉生 1994)、である。このうち、教育実習のあり方に関する研究や、大学の教官や実習校の指導教諭が論述した教育実習の指導に関する研究が多く、音楽科教員養成カリキュラムとしての教育実習で何が、どのように行われているかという「教育実習の実態」を実習生の視点から行われた研究はほとんどない。

中国では、総合大学でも教員養成が認められるという「開放性教師養成制度」が取り入れられているが、実際には、師範大学がほぼすべての教員を養成する任務を担っている。そこで、本研究は、中国のA師範大学音楽学院⁵⁾における音楽科教員養成カリキュラムにおける教育実習、特に主要な部分である授業実習を対象として、実習生の視点による実習の実態から現状を明らかにし、今後の改善に示唆を得ることを目的とする。

2. 調査の概要

2.1 目的

A師範大学音楽学院の教育実習の事前・事後指導、学生の意識、活動状況、大学教官と実習校の指導教

論による実習生の指導などの実態を明らかにし、今後の改善に示唆を得ることを目的とした。

2.2 期間と方法

A師範大学の事前指導（2005年9月8日）と事後指導（2005年10月26日）、及び実習校2校における教育実習（2005年9月－10月）を観察し、その概要をまとめた。さらに、A師範大学音楽学院音楽教育専攻の4年生（2005年10月現在）で、教育実習（2005年9月－10月）を経験した58名を対象として、事後指導の直後に質問紙調査を行った。

その後、A師範大学音楽学院の2名の教官に対して大学のカリキュラムについてインタビュー調査を行った。質問紙は、4段階評定、選択、及び自由選択からなる。

2.3 内容

質問紙の内容は、以下のとおりである。

- (1) 教育実習の概要：実習生の性別、実習校の種別、各校種の実習生数
- (2) 教育実習前の活動状況：実習生の心理状態、大学の事前指導
- (3) 教育実習における活動状況：実習校の事前指導、実習生の活動状況、実習校指導教諭と大学教官の指導状況
- (4) 教育実習後の活動状況：実習生の意識、大学の事後指導

調査項目の作成にあたって、力量・葛軍（2000）、ミンミンサン（2000）、『A師範大学学生教育実習計画』（2001）（以下『実習計画』）、周成（2002）、姫野（2003）を参考とした。調査に用いた質問紙を文末に示した。

2.4 調査実施の概要

今回の質問紙調査では、58部を配布し、53部を回収した。回収率は91.4%であった。回収された質問紙はすべて有効であった。

今回の回答者のうち、男子は17名（32.1%）、女子は36名（67.9%）であった。

表1 実習校の種別及び各種類の学校に配置された音楽科実習生の数

実習校の種別	学校数 (%)	実習生数 (%)
小学校	2(10)	2(3.8)
中学校	14(70)	44(83.0)
高校	3(15)	6(11.3)
他(中等師範学校)	1(5)	1(1.9)
計	20(100)	53(100.0)

3. 調査の結果と考察

3.1 実習の概要

中国の音楽科教員養成カリキュラムでは教育実習は必修科目となっている。A師範大学は教員養成を主な目的とする大学であり、音楽学院は毎年約60名の音楽科教員を養成している。教育実習の質と学生の実践的指導力を向上させるために、2001年度から、すべての学院の教育実習に関する事前・事後指導、及び実習中の指導などは、各学院ではなく、教師專業發展学院⁶⁾が行うこととなった。

2005年度の教育実習は、9月8日の事前指導、9月13日－10月21日（7週間）の実習校実習、10月26日の事後指導からなる。

事前指導は、全大学の実習に参加する学生を集めて4時間の日程で実施された。その内容は実習の意義、目的、マニュアルを示すこと、及び実習録の記入方法と注意事項などについて、教師專業發展学院の担当教官がそれぞれ講義、説明を行うというものであった。

実習校実習は、実習校における事前指導、1週間の観察実習、及び5週間の授業実習（10月1日－9日は休み）からなる。1つの実習校に、様々な専攻の実習生が8－22名配属された。原則として、大学側が実習校を確定し、実習生を配属する。しかし、学生個人が実習校を決めることも大学側に認められているので、今回の実習校実習では3名の実習生が自ら実習校（小学校2校、師範学校1校）を決定した。各実習校に大学の教師專業發展学院から派遣された教官（各実習校に最低1名）は、連絡や実習生の指導を担当する。実習校における事前指導では、実習校の教育現状、理念、及び党の教育方針に関する講演、各教科に関する説明と教学研究会、師範授業、及び師範授業の討論会などを中心として行われたのが一般的であった。観察実習は、実習校音楽科のすべての教諭の授業を中心として行われた。他教科の教諭の授業を

観察した実習生もいた。観察の時間数が大学側にはっきりと規定されていないため、各実習生の観察時間もそれぞれ異なった。授業実習は、指導教諭の指導のもとで行われた。

事後指導は、10月26日に音楽学院の4年生（すでに実習を経験した学生）を集めて実施され、補導員（主として学生の生活、学業などを指導する教師）が実習の概要、出席状況、実習校との交流、課外活動の成果等を総括した。

また、実習校実習の要件として、「中等学校音楽教授法」と「音楽教授技能訓練」の2科目の履修が必要とされている。それぞれが第3学年の前期と後期に開講されている。その内容については、後述する。

3.2 実習の実態

3.2.1 実習前の状況

図1は、実習前に大学の「音楽教授技能訓練」で行った模擬授業が「授業全体」か、「授業の一部」か（複数回答可）を、示している。「音楽教授技能訓練」は1学期（約31時間）にわたって開講された。そのうちに、模擬授業に当てられた時間は約12時間であり、1名の学生に与えられた時間は約12分間であった。そのために、すべての学生が授業全体の模擬授業を行うことは不可能

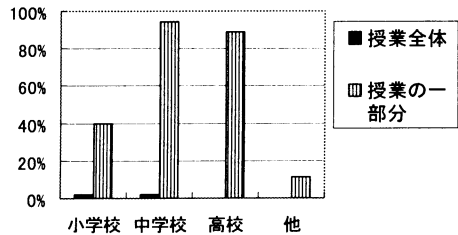


図1 実習前に模擬授業を行った経験

であるので、授業の一部を取り出して行うことになった。2005年度のほとんどの実習生は、授業の一部を行った経験をもつが、1時間の「授業全体」を行った経験をもつ学生は調査対象の3.8%であった。

初めて教育現場としての学校で授業を行い、課外活動を組織し、児童・生徒と身近に接するために、実習生は多くの不安をかかえていることが予測される。

実習前に、「非常に不安」と「やや不安」と感じた実習生が非常に多いことを、図2は示している。図2から、「非常に不安」と感じたことの比率が「とても安心」と感じたことの比率よりも著しく高いことが明らかである。その内容を見ると、半数以上の実習生は「授業の実施」、「楽器合奏の指導」、「課外活動の組織と指導」、「課程標準の応用」について、不安を抱いている

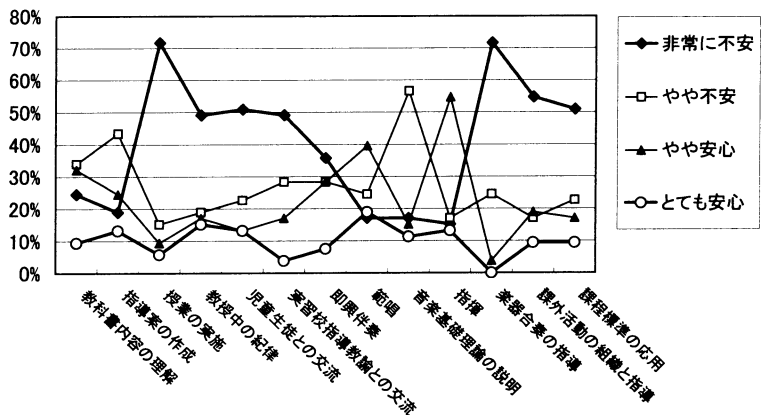


図2 実習前実習生が感じた不安要素 (%)

ことが分かる。また、「やや不安」と回答したもっとも多かった項目は、「音楽基礎理論の説明」、「指導案の作成」と「教科書内容の理解」という3つの項目であった。これらの不安はほとんど教授実践に関することである。従って、大学のカリキュラムは、実践的指導力の養成をいっそう重視する方向へ改革されなければならないと考える。

中国のほとんどの師範大学と同様、A師範大学は教育実習の前に事前指導を行う。その事前指導の効果を尋ねると、A師範大学の事前指導は、実習に対して「あまり役に立たなかった」と考えている実習生が86.8%にも達している（図3）。この要因

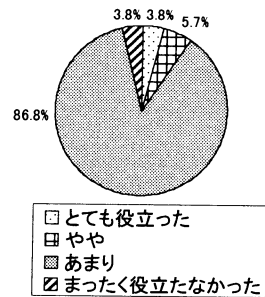


図3 大学の事前指導の効果 (%)

として考えられるのは、A 師範大学の事前指導の内容が「実習の重要性と必要性を理解させ、目的とマニュアルを明確させる」ということにとどまり、実習の具体的な内容・方法、特に教授上必要とされる基礎的・予備的知識に関する内容をほとんど与えていないからである。

学生たちは、事前指導内容についてどのような要望をもつかを図 4 に示す。全体的に見ると、「強く希望する」と回答した率が高い。しかし、「教育実習の目的、重要性、必要性の強化」に対して、「強く希望する」と回答した率は「強く希望する」と回答した率を上回った。一方、「過去の実習生授業のビデオ観察と討論」という内容を加えることが被調査者全員に望まれていることと、「児童・生徒との関わり方」と「現場教諭の講演」に関する希望も、それぞれ高い比率に達していることが分かる。つまり、学生たちは事前指導において、実際の教育、教授に関する方法や経験をより多く得たいことが分かる。このことも、A 師範大学の教育実習の大学における事前指導内容の改善方向づけることができるであろう。

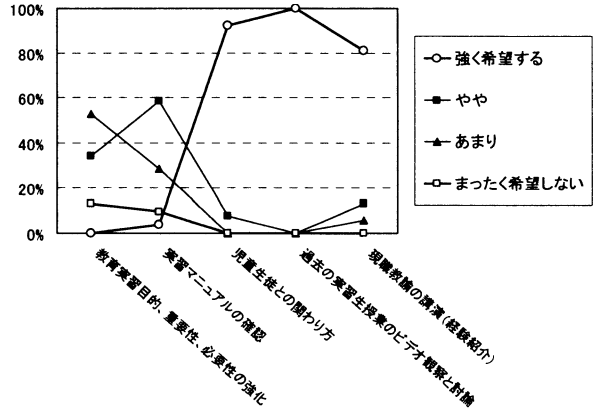


図 4 大学の事前指導の内容に対する希望 (%)

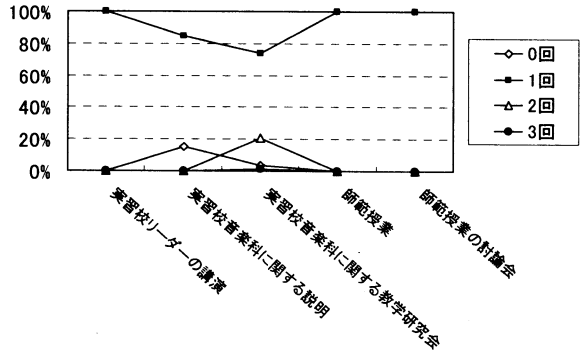


図 5 実習校の事前指導へ参加の状況 (%)

3.2.2 実習中の状況

(1) 実習校における事前指導

実習校による事前指導は、実習生が入学した直後に実習校で行われた。入学後、「1. 実習校のリーダーによる実習校の教育現状、理念、及び党の教育方針に関する講演を聞く」、また「2. 各教科に関する説明」と「3. その教科に関する教学研究会」に参加する、さらに、実習校は 1 人の現職教諭を選び、実習生全員に「4. 師範授業を行う」、そしてその授業に対して、「5. 討論会を行う」などの実習校による事前指導が『実習計画』の中で定められている。これらへの参加回数を、図 5 に示している。ほとんどの実習生は 1-5 の講演や師範授業、討論会に参加したことが分かる。しかし、8 人の実習生は「2. 実習校音楽科に関する説明」に、2 人の実習生は「3. 実習校音楽科に関する教学研究会」に 1 度も参加しなかった。その理由は、受験競争のため、ある中学校では音楽科を軽視し、音楽科の教育実習においても音楽科に関する説明と教学研究会も行わなかったのではないかと筆者は推測した。一方、「3. 実習校音楽科に関する教学研究会」に 2 回、もしくは 3 回参加したことがある実習生もいた。

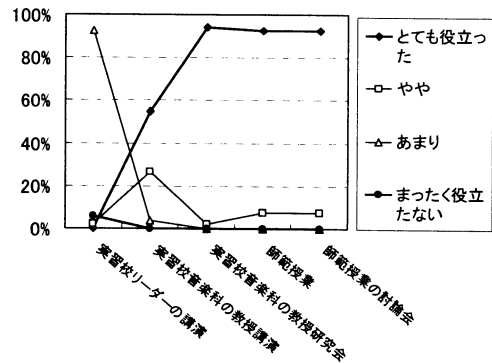


図 6 実習校の事前指導が実習生に及ぼした効果 (%)

次に、実習校による事前指導の効果について尋ねた。その結果を図6に示す。2-5の項目について、ほとんどの実習生は「とても役立った」と評価した。しかし、「1. 実習校リーダーの講演」は「あまり役立たない」と思った実習生がほぼ全員に達していることとなる。このことから、実習生が実習前により教育現場の実態を把握し、実践的指導力を高めるためには、「2. 音楽科に関する説明」、「3. 音楽科に関する教学研究会」、「4. 師範研究授業」、「5. 師範授業の討論会」という指導が有効であり、さらに大学での事前指導でもこれらを充実させることが必要であると考えらる。

(2) 実習生の活動の実態

図7は、実習の期間内の実習校の教諭及び他の実習生の授業を観察した時間に関するグラフである。図7から、半数以上の実習生は現職教諭の授業を4-6時間観察したことが分かる。しかし、他の実習生の授業を観察した時間がきわめて少なかったことも明らかになっている。

また、授業観察が、実習生に大きな印象を及ぼした各項目の比率を表3に示している。現職教諭の授業に対して、実習生は様々な側面において大きな影響を受けていたと答えた。特に、「授業の流れ、展開」、「時間配分、ペース」、「教科書の理解」、「発問の方法」、「説明の方法」、「授業の雰囲気」、及び「課程標準の応用」という7つの項目について、ほぼ全員が強い印象を及ぼしたことが分かる。一方、実習生の授業から受けた強い印象には、「教師との差」、「指摘された点」という2つの項目が最も多かった。このことから、実習生は、現職教諭の授業と他の実習生の授業から、実習に役立ったことを学んでいることが明らかである。

各実習生の「実習授業の開始日」、「1日あたり最大の授業時間数」、及び「実習における授業の総時間数」を、それぞれ図8、図9、図10に示している。同一の実習校における指導教諭の数、音楽科実習生の数、学級の数などはそれぞれ異なるので、各実習生の間で、「実習授業の開始日」、「1日あたり最大の授業時間数」及び「実習授業の総時間数」もそれぞれ相違が表れている。66%の

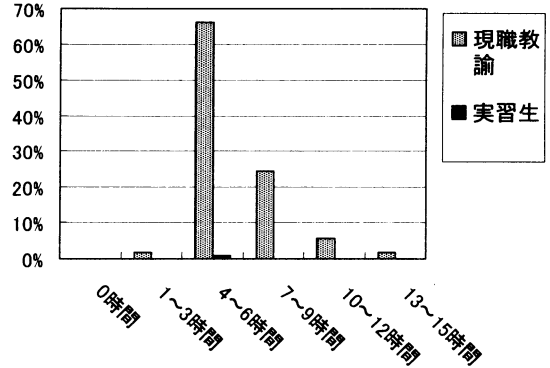


図7 現職教諭と実習生の授業観察時間 (%)

表3 授業観察が実習生に及ぼす効果 (%)

現職教諭の授業		実習生の授業	
授業の雰囲気	94.3	授業の雰囲気	9.4
板書の方法	11.3	板書の方法	5.7
間のとり方	43.4	間のとり方	5.7
授業の流れ、展開	100.0	授業の流れ、展開	7.5
発問の方法	96.2	発問の方法	17.0
説明の方法	96.2	説明の方法	17.0
時間配分、ペース	100.0	時間配分、ペース	11.3
声の大きさ	90.6	声の大きさ	7.5
教科書の理解	98.1	教科書の理解	5.7
教授の重点	92.5	教授の重点	13.2
教授方法	86.8	教授方法	15.1
音楽課程標準の応用	94.3	音楽課程標準の応用	3.8
伴奏と範唱	39.6	伴奏と範唱	9.4
分かりやすい点	88.7	分かりにくい点	30.2
教師による授業方法の差	92.5	指摘された点	41.5
改善すべき点	24.5	教師との差	66.0
児童・生徒の音楽感受力の育成	79.2		

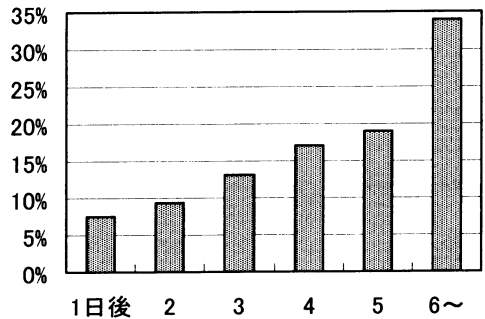
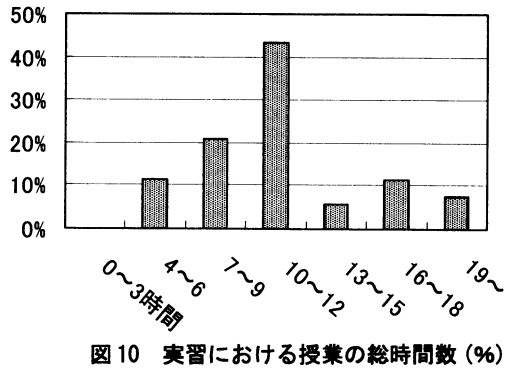
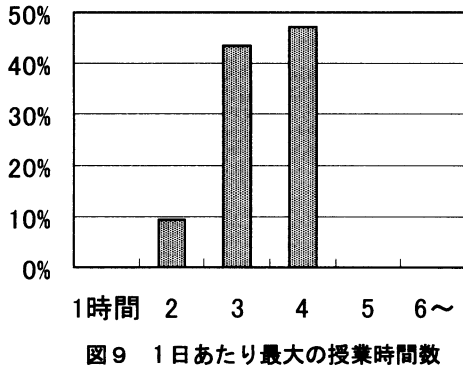


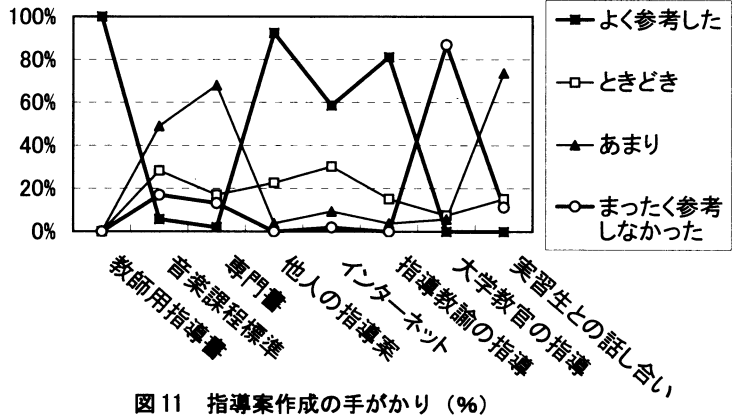
図8 実習授業の開始日 (%)



実習生は入校した1週間以内に、実習授業を始めていることが分かる。90%近くの実習生は、大学の『実習計画』の中で規定されている「実習において、最低8時間の実習授業を行わなければならない」という基準を満たしている。さらに、67.9%の実習生は、10時間以上の実習授業を実践したことが分かる。しかし、少数の実習生(11.3%)は、8時間という基準に達していなかった。その原因を尋ねると、①実習校で年に1度の「運動会」が行われたので、音楽科、美術科、体育科などの授業時間が運動会の準備に使われたからである、②様々な学校音楽コンクールに参加し、賞を得るために、実習校はその練習を主な課題として、実習生に課していたからである。実習校の課外活動を組織、指導すれば、8時間の基準に達さなくても、よい実習成績がもらえる、とある大学教官が語った。

表4 指導案作成の頻度

実習授業の時だけ	実習授業以外に			作らなかった
	1日ほとんどの時間	1日に数時間	1週間に数時間	
84.9%	0.0%	5.7%	9.4%	0.0%



実習生は実習校で初めて教育現場で、児童・生徒を対象にして実際の授業を実施するのであるから、実際の経験と臨機応変に対処する能力が高くないといえる。授業を順調に行うために、指導案の作成はきわめて重要である。表4と図11は、「指導案作成の頻度」、及び「指導案を作成する際の手がかり」を示している。ほとんどの実習生は、常に指導案を作成しているわけではなく、実習授業を実施する前だけに、指導案を作成していた。このことから、指導案作成の頻度は非常に低いといえる。また、半数以上の実習生は、指導案を作成する際に、「教師用指導書」、「他人の指導案」、「インターネット」、及び「指導教諭の指導」を参考とし、逆に、「音楽課程標準」、「専門書」、「実習生との話し合い」をあまり参考としなかったことが分かる。よく参考にされた4つの中から、「他人の指導案」と「インターネット」に注目したい。なぜなら、多くの優れた指導案がインターネットの普及に伴って、簡易に入手できるようになっているからである。筆者が、幾人かの実習生にインタビューした結果、インターネットや先輩などをとおして、すでに完成された指導案を入手し、そして、自分の授業実習にそのまま使用した実習生が数多く存在していることが分かった。

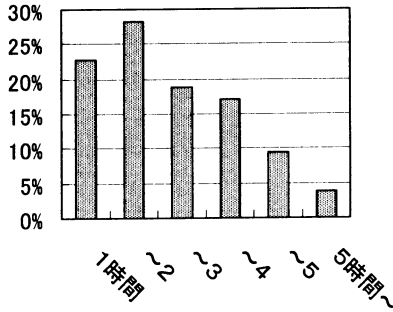


図12 1時間の授業の準備時間

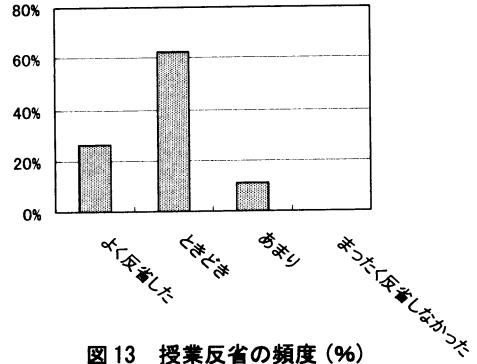


図13 授業反省の頻度 (%)

A 師範大学音楽学院の教科に関する教職専門科目「音楽科教授技能訓練」においては、指導案の作成が1つの重要な内容として扱われており、授業中や最後の試験などで何度も指導案の作成を学生たちに課した⁷⁾。しかし、半数近くの実習生が指導案の作成に対して「やや不安」と感じた理由は、上記の「インターネットや先輩のすでに完成された指導案をそのまま使用する」という問題が大学の授業にも存在しているからであろう。

次に、1時間の授業の準備時間について尋ねたところ (図12)、50.9%の実習生は、1-2時間を費している。1時間の短い授業を準備する際に、様々な工夫をすることこそ、よい授業づくりにつながるであろう。しかし、1-2時間で授業の準備を済ませることは不思議だと考える。このことから、1-2時間しか使わなかったことによって、多くの実習生がすでに完成された指導案を使用して、実習授業を行ったのではないかと、という疑問が生じる。

図13、図14は実習生が各自の授業に対する反省の実態を示している。図13から、90%近くの実習生は自身の授業に対して、「よく」、もしくは「ときどき」反省していることが分かる。反省には、「他人と検討する」、「指導法の改善策を考える」、及び「師範授業を研究する」、という3つがもっともよく使用されている。しかし、「指導案の見直し」があまり行われていなかった。

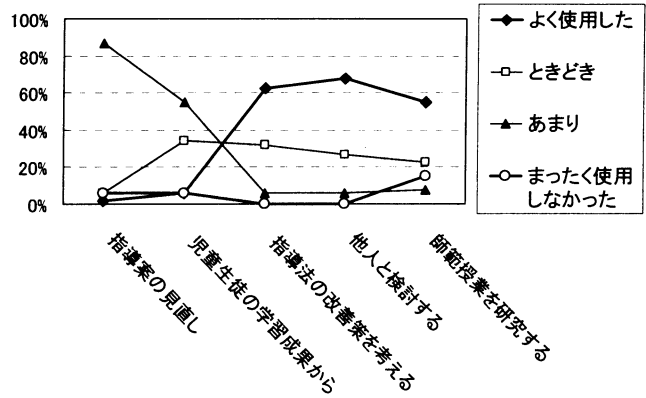


図14 授業反省の手がかり (%)

(3) 指導の実態

指導案を作成する際の、「指導教諭の指導」を「よく」、もしくは「ときどき」受けた51人の実習生から、その指導の内容を答えてもらった (図15)。「指導案の書き方」以外は、ほとんどの項目に関して、指導された実習生の比率が高いことが分かる。

指導案を完成し、実際に授業を行う段階に入る。実習生は、指導教諭の指導のもとで、「最初の実習授業を実施する前に、……必ず実習校の指導教諭、大学教官、及び他の実習生の前で、模

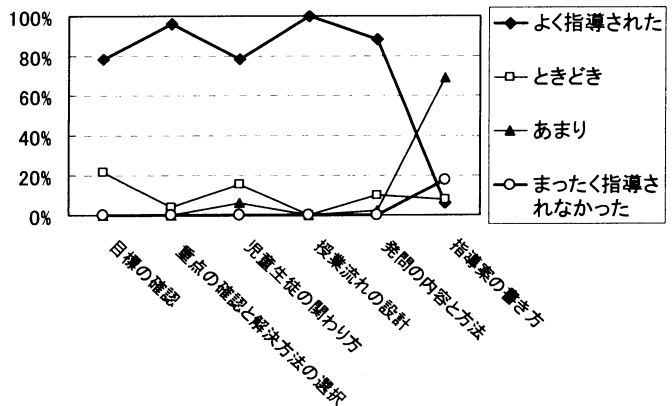


図15 指導案作成する際の指導された内容 (%)

擬授業とその討論会を行う……』と『実習計画』に記されている。しかし、実際には、すべての実習生が行ったわけではない。図16から、最初の実習授業を実施する前に、模擬授業及び討論会を行ったかどうかに関しては、それぞれ88.7%と83%の実習生が行い、11.3%と17%の実習生が行わなかった。模擬授業及び模擬授業後の討論会の実施によって、「授業の実施」、「児童・生徒との交流」などへの不安感を解消したり、模擬授業で生じた問題点に改善の方法と方向を明確化することができるので、教育実習において、きわめて重要な意義と役割をもつといえる。上記の3名と10名はどのような原因で模擬授業と討論会を行わなかったかについてさらに検討する必要がある。

実習生は授業実施の後に、問題点や改善点などについて、再び指導教諭から指導を受ける必要がある。実習授業実施後の指導を受けた人数と指導内容を図17と表5に示している。実習授業実施の後に、86.8%の実習生は指導教諭から「よく」、もしくは「ときどき」指導を受けたが、13.2%の実習生は「あまり」、もしくは「まったく」指導を受けなかった。指導の内容としては、「言葉づかいや声の大きさ」、「伴奏と範唱」、「音楽の歴史、文化に関する説明の方法」、「児童・生徒への接し方」という4つの内容についての指導が多かったことが分かる(表5)。

実習授業の段階において、実習校の指導教諭と大学教官は実習生の授業を観察し、問題点と改善点を指摘することによって、実習生の実践的指導力の成長に大きな影響を与える。しかし、図18から、指導教

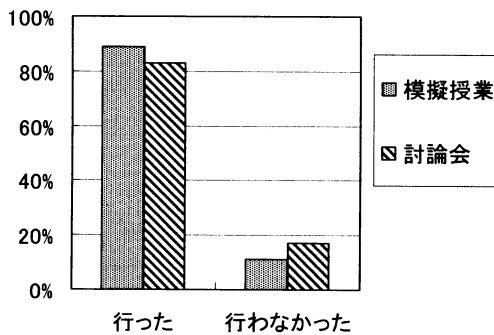


図16 模擬授業及び討論会の実施の状況 (%)

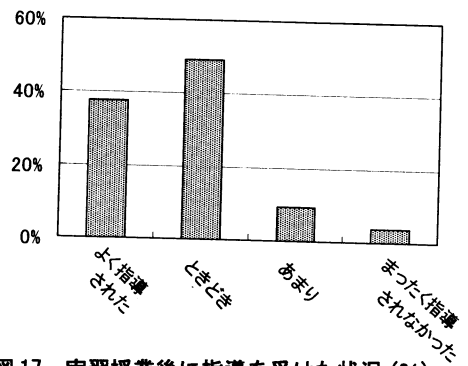


図17 実習授業後に指導を受けた状況 (%)

表5 実習授業後の指導内容

授業の内容	割合 (%)
授業展開の方法	22.6
板書の方法	0.0
発問の内容と方法	35.8
児童・生徒への接し方	52.8
授業の目標設定	5.7
言葉づかいや声の大きさ	84.9
教授方法の選択	41.5
CAIを用いた教材の製作	28.3
伴奏と範唱	62.3
音楽の歴史、文化に関する説明の方法	58.5
リトミックの方法	22.6
音楽基礎理論指導の方法	20.8
指揮の方法	11.3
合唱・合奏指導の方法	35.8
音楽課程標準の理解	11.3

表6 授業実施前後の指導内容の比較

模擬授業実施前	実施後 (%)
1. 授業流れの工夫	1. 言葉づかいや声の大きさ
2. 目標の確認	2. 伴奏と範唱
3. 重点の確認と解決方法の選択	3. 音楽の歴史、文化に関する説明の方法
4. 発問の内容と方法	4. 児童・生徒への接し方

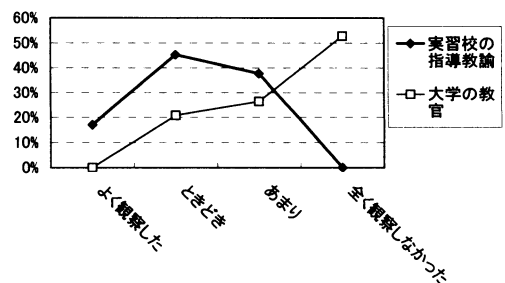


図18 実習生の授業への観察状況 (%)

論と大学教官は常に実習生の授業を観察しているわけではないことが明らかになった。そのため、実習生が授業を実施した後、実習生をどのように指導するかという疑問が残ってしまうのであろう。

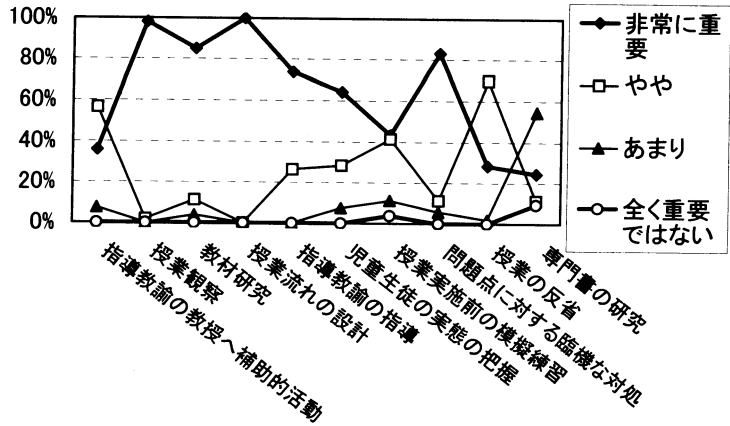


図19 授業実習の各段階と手順の重要度 (%)

3.2.3 実習後の状況

実習生の実習終了後の感想と意識については、図19、図20、図21に示している。図19は実習生が授業実習に関する各段階や手順に対して感じた重要度である。「専門書の研究」を除いて、他の項目に対して、半数以上の実習生は「非常に重要」、もしくは「やや重要」だと考えている。

実習前には様々な不安もっていた実習生は、実習を経験してから、実習の意義、内容、及び方法に関していっそう深く認識することができ、実習の効果を高める方法がますます明確になっているものと思われる。実習生が回答した方法を、図20に示す。90%強の実習生は「教授能力の向上」、「指導教諭との交流」という方法が実習の効果を高めることに対して、非常に有効であると考えたことが分かる。このことは、教育実習によって、実習生自身が音楽技能の獲得よりも、実践的指導力の育成を重視するという意識へ変化したと見なすことができる。

次に、教育実習における、もっとも難しいと考えていることについて尋ねたところ、図21の結果が示された。「課外活動の組織と指導」以外のすべての項目を「難しかった」と思う実習生は半数を超えた。

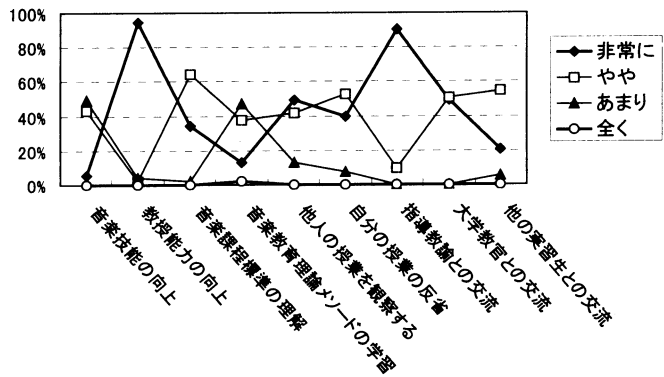


図20 実習の効果を高める方法 (%)

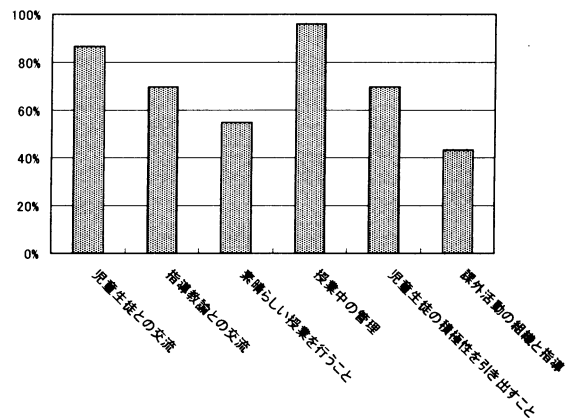


図21 実習について最も難しいと思われること (%)

4. 考察及び今後の課題

4.1 事前・事後指導の改善と充実

前述したように、A師範大学における事前指導は、4時間の日程で、実習の意義、目的、及び実習における注意事項を中心として行われた。時間的には短く、内容的には実習校での授業、児童・生徒とのコミュニケーションのとり方、及び課外活動の指導法などとは関連のないものであった。そのため、質問4(資料参照)(図3)「大学の事前指導は実習生の不安解消にどの程度役立ったか」のように、大学における事前指導が不安を解消することに「あまり役

立たなかった」と感じていた実習生は90%以上にも達していた。実習生が感じた不安は、「授業の実施」、「器楽合奏の指導」、「課外活動の組織と指導」、「課程標準の応用」、及び「児童・生徒との交流」などに集中していることが分かる。これらの不安を解消することが事前指導の改善の視点となるであろう。しかし、そのような内容が事前指導に取り入れられると、4時間という日程と教官による説明だけでは不足していると考ええる。事前指導内容の改善と充実とともに、実施期間及び方法も改善しなければならないと考える。

一方、質問7(図6)「実習校の事前指導は実習に役立ったか」の結果を見ると、大きな役割を果たしたといえる。実習校における事前指導の内容と方法も、大学の事前指導やカリキュラムの中に取り入れられることが望ましいと考える。

事後指導は、事前指導と同様に重要であり、実習生の能力を向上させ、知識を増加させることと、大学の教育実習課程の改善に大きな意義をもつといえる。しかしながら、A師範大学音楽学院2005年度教育実習の事後指導の内容に関しては、実習の概要、出席状況、実習校との交流、課外活動の成果などを主として学年の担当先生が総括したもののみであった。そのような事後指導は、実習生が実習をとおして感じたことをより高い認識に固める機能や、習得した教職技能をさらに強化する機能を果たしておらず、感性的な段階でとどまった傾向にあると考える。教育実習、特に授業実習の内容、方法、教師としての心構え、実習の成果と反省点を実習生に自覚させることが今後の課題となると思う。

4.2 実習の実施と実習生への指導について

A師範大学の『実習計画』では、実習生は実習校に入校して、1週間の観察実習(指導教諭の授業への補助的な参加も含める)を経てから、授業実習を行うと規定している。しかし、質問11(図8)「授業実習の開始日」の結果から、約30%の実習生が、入校して1日-3日後から授業実習を始めたことが分かる。教育実習における観察実習は、授業実習の基礎であり、観察や指導教諭の授業への補助的な参加などをとおして、教授に関する注意すべきことや、指導教諭の良さ、授業の指導法、児童・生徒の実態などを初歩的に把握することができる。観察実習を経験せず、もしくは2、3日間の経験だけによって、上記のようなことを把握することは困難であると考ええる。

質問8(図16)「最初の実習授業を行う前に、模擬授業及びその討論会の実施」について、模擬授業は、88.7%の実習生が行い、11.3%の実習生が行わなかった。授業後の討論会は、83.0%の実習生が行い、17.0%の実習生が行わなかった。前述したように、模擬授業及び模擬授業後の討論会の実施は、「授業の実施」、「児童・生徒との交流」などへの不安感を解消したり、模擬授業で生じた問題点に改善の方法と方向を明確化することができるので、教育実習において、きわめて重要な意義と役割をもつといえる。実習校の指導教諭は実習生の最初の実習授業を行う前に、しっかりと模擬授業及びその討論会を組織し、指導することが望ましい。

実習生は授業実施の後に、問題点や改善点などについて、再び指導教諭から指導を受ける必要がある。実習授業実施後の指導の頻度と指導の内容を質問20(図17)と質問21(表5)に示している。実習授業実施の後に、86.8%の実習生は指導教諭から「よく」、もしくは「ときどき」指導を受けたが、13.2%の実習生は「あまり」、もしくは「まったく」指導を受けなかった。指導の内容としては、「言葉づかいや声の大きさ」、「伴奏と範唱」、「音楽の歴史、文化に関する説明の方法」、「児童・生徒への接し方」という4つの内容についての指導が多かったことが分かる。

ここに、模擬授業を実施する前と実習授業を実施した後で、指導教諭による指導の内容に大きな変化が見られる。それぞれの内容を表6に示す。模擬授業実施前には、授業の流れ、目標、指導法などの「授業づくり」に関して多くの指導がなされたが、実習授業後には、実習生の実習授業中の問題点に関して多くの指導がなされたことが分かる。しかし、授業で生じた問題点を「授業づくり」とのかかわりや、指導案の見直しなどと関連づける指導は少なかった。

実習授業の段階において、実習校の指導教諭と大学の教官は実習生の授業を観察し、問題点と改善点を指摘することによって、実習生の実践的指導力の成長に大きな影響を与える。しかし、質問22(図18)「指導教諭と大学教官のあなたの実習授業の観察の頻度」の結果から、指導教諭と大学教官は常に実習生の授業を観察しているわけではないことが明らかになった。そのために、実習生が授業を実施した後、実習生をどのように指導するかという疑問が残ってしまうのであろう。その原因を現場の教諭に聞くと、「実習

生に緊張感をもたせたくない」という答えが多かった。しかし、大学側が派遣した教官の専攻はそれぞれ異なっており、すべての教官が音楽科教育専攻の実習生を十分に専門的に指導できるわけではない。そのために、実習生により詳細な指導を与える点で実習校の指導教諭の担う役割は大きいと考える。

4.3 実習時間の増加と期間の調整

教職的資質と能力は、長期間の実践によって育成されるものである。質問23(図19)「教育実習におけるもっとも重要なこと」と質問24(図20)「教育実習の効果を高める方法」の結果から、6-8週間の教育実習では、養成段階にある学生たちの教職に対する意識を転換させることは可能であるが、教育実習で生じた問題点を解決したり、さらに改善に向けて実践するための時間は不十分であると考えられる。そのような問題を改善するために、教育実習(観察も含めて)の時間の増加だけではなく、現在の4年生だけで行われる集中的な教育実習を、1年-4年にかけて各段階に対応できる分散的な教育実習へと変える、という実習期間の調整もいっそう望まれると考える。このことによって、学習した知識、理論を常に実践と関連づけ、理論から実践へ、また実践から理論へという交互作用が生じ、螺旋的な形で教職的資質と能力が洗練、向上させることができるであろう。

4.4 実習生の教職意欲の向上

教職に対する意欲は、教職的資質・能力などの実習の効果に直接に関わってくるが、筆者は今回の調査をとおして、A師範大学の実習生の教職に対する意欲がやや低かったと感じている。質問19(図13)「自分の授業に対する反省の頻度」の結果から、90%弱の実習生は、自分の実習授業に対して「よく」、もしくは「ときどき」反省したが、質問9(表4)「現職教諭と実習生の授業の観察時間」と質問16(図11)「指導案作成の手がかり」の回答では、高い意欲が見いだせなかった。実習の過程において、現職教諭の授業を10時間以上観察した実習生は7.5%、他の実習生の授業を10時間以上観察した実習生は1.9%しかいなかった。また、指導案作成の手がかりとして、教師用指導書に頼ったり、既に完成された他人の指導案をそのまま使用したりしていた実習生が数多く存在していた。

このような状態に至った背景として、2つの要因が考えられる。第1は、音楽技能を重視する傾向が実習校にも存在している。省・市・区などの各「文芸(音楽)コンクール」で賞を得るために、ある実習校はその練習を主な課題として、実習生に課していた。それらのコンクールでよい賞を得ると、実習生は『実習計画』の中で規定されている「最低8時間の実習授業を行うこと」という基準を満たさなくても、優秀な実習の成績ももらえる。このことで、教授に関する実践的指導力よりも、音楽実技を向上すれば、教育実習、もしくは将来の仕事にもっと役立つという印象を実習生に与えるであろう。第2は、文化大革命の影響や、旧ソ連の音楽科教員養成カリキュラムを援用したり模倣したことのほか、中国の一般的な認識として、音楽科教員養成課程の学生であるにもかかわらず、「私はピアノ専攻である」、「私は声楽専攻である」と考える者が多く、「私は音楽教育専攻である」と考える者は非常に少ない。中国の音楽科教員養成教育において、音楽技能の訓練と音楽理論の学習に関する科目が重視され、教職に関する科目が軽視されたことが、現在の音楽科教員養成教育にも大きな影響を与えていると考える。

このような現状を改善するためにも、学生の正しい教育観、積極的な教職への意欲も育成させなければならないと考える。

4.5 教職専門科目に関する課題

本調査時の『A師範大学音楽学専業(師範類)教学計画』(2002年)における教職専門科目と教科専門科目の割合を図22で示している。教科専門科目の割合は教職専門科目の割合よりも、圧倒的に多かった。教職専門科目として開講されているのは、「現代教育技術と応用」1単位、「心理学」1単位、「教育学」3単位、「教職技能訓練」(実際には、「音楽教授技能訓練」という科目名で実施された)2単位、「中学校音楽教授論」2単位、及び「中学校学科教育研究与实践」1単位、「教育実習」4単位、計14単位にすぎず、卒業要件である168単位のわずか8.3%を占めているだけである。

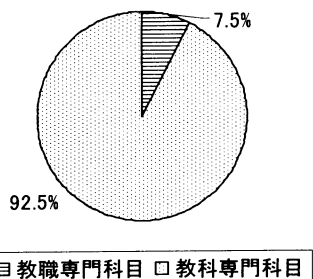


図22 教職専門科目と教科専門科目の割合の比較

そのうち、音楽科教員養成に直接関連する科目は、「音楽教授技能訓練」と「中学校音楽教授論」だけである。

「中学校音楽教授論」は、教育実習の1年前に開講される。その担当者であるB先生へのインタビューによって、そのおおまかな内容は、音楽科教育の基礎理論、音楽科カリキュラム概論、音楽科教育通史、音楽科教授法に分けることができる(表7参照)。これらの内容を1学期の授業の中で、学生に深く理解させ、身につけさせることは困難であろう。また、A師範大学音楽学院教務主任C先生は、授業形式も単純な講義であり、専門書や文献・資料を読むことにとどまり、実践とかかわる時間はほとんどないと語った。そのような授業が、教育実習に大きな役割を果たすと考えることはできない。また、師範大学音楽学院のかつての目標は、「中等学校の音楽科教師を養成する」ということにあったが、近年では卒業生が小学校に採用された例も

ますます増加する傾向にある。そのことから、「中学校音楽教授論」だけではなく、もっと幅広い内容が大学カリキュラムに取り入れられることが望ましい。

一方、「音楽教授技能訓練」は(表7参照)、ビデオ観察や討論会、指導案の作成と説明、模擬授業、学校での授業観察、などという様々な内容と方法で、学生たちの実践的指導力をしっかりと身につけさせることができた。担当のB先生は語った。しかし、この科目は1学期(5か月間)しか開講されず、ほとんどの学生が完全な模擬授業を行う時間的余裕はなかった。そこで、この授業の期間を延長することと、その授業方法を他の教科専門科目へ応用することによって、音楽科教員養成段階において、学生の実践的指導力を育成させ、教育実習の効果を向上させることができると考える。

また、学生は上記の授業形式をとおして、よい授業の優れたところ及びよくない授業の注意すべきところを感じ取りながら、自らの知識とすることが可能であると考えられる。しかし、そのような知識は理論的、概念的な知識にとどまり、実際の応用力に転化していないために、実践的指導力を向上させることは困難であろう。このことから、学校現場とのつながりをいっそう促す、という大学カリキュラムの改善の課題と方向が見いだせるであろう。

注

- 1) 馬達『20世紀中国学校音楽教育』上海教育出版社、2002年、p.172
- 2) 朱咏北『21世紀高師音楽教育研究』湖南師範大学出版社、2004年、p.47
- 3) 例えば、金偉生(1994)「実習在高師音楽教育中的地位和作用」、張錦華(1998)「関与高師音楽專業学生素質培養的再思考」、劉延新(2001)「談高師音楽教育与中小學校音楽教学需要的矛盾」などである。
- 4) Cnkiデータベース(中国)による。Cnkiは中国のほとんどの大学や研究所で使用されている専門的な学術論文、修士論文、博士論文を検査するネットワークである。 <http://www.cnki.net>
- 5) 日本の大学における教育学部の中の音楽専攻に相当する。師範類(音楽教育専攻)と非師範類(音楽

表7 「中学校音楽教授論」と「音楽教授技能訓練」の目的、内容、方法と評価

	「中学校音楽教授論」	「音楽教授技能訓練」
目的	音楽科教育の基礎理論を理解させる	教授的能力を向上させる
内容	1. 音楽科教育の性質、価値と理念 2. 音楽科カリキュラムの目標 3. 音楽科教育通史 4. 音楽科教育の原則 5. 『課程標準』と教科書、及び基礎教育改革の内容 6. 音楽科教授の流れ 7. 音楽科教授の模式 8. 音楽科教授の方法 9. 音楽科教授の組織 10. 音楽科教授の評価 11. 課外音楽活動	音楽科教授の実践
方法	講義	1. 講義(20%) 2. 説課*(40%) 3. 模擬授業(40%) 4. ビデオ観察(他の3つの方法と同時に)
評価	試験	指導案の作成

*「説課」とは、指導案を作成した後と、模擬授業を実施する前、という中間段階において、作成した指導案及びその教材を説明する、という指導・学習方法である。

専攻)という二つの分野に分けている学校が多数である。

- 6) A 師範大学の1つの機関として2001年度に新たに設置されている。全校の師範専攻(教員の養成を目指す専攻)の教職科目(もちろん教育実習も含まれている)、もしくは教職専門科目を担当し、実施する。
- 7) 該当する担当教師による。

主要参考文献

- ・ 金偉生「実習在高師音楽教育中的地位和作用」、『中国音楽』1994年第3期、pp. 30-31
- ・ 蔡夢「関与音楽教学実習的訪談記録」、『中国音楽教育』1999年第5期、pp. 33-35
- ・ ミンミンサン『新任教師の資質・能力の向上に関する研究—教員養成、初任者研修及び教職経験の影響を中心に—』、広島大学博士論文、2000年
- ・ 力量・葛軍「高師学生教育実習現状調査」、『淮陰師範学院学報(哲学社会科学版)』総第89期、2000年、pp. 131-133
- ・ 周成「師範院校教育実習質量的研究と実践」、『黒竜江高教研究』総第106期、2002年、pp. 117-119
- ・ 姫野 寛治「教育実習の実態に関する基礎的研究—教職志望学生への質問紙調査を通して—」、『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第25号、2003年、pp. 89-99
- ・ 板俊栄「高師音楽教育実習の回顧、現状と建議」、『南京曉庄学院学報』第21巻第2期、2005年 pp. 89-91

資料：教育実習に関する質問紙調査

性別：男 女 実習校の種類別：小学校 中学校 高校 他（ ） 同じ実習校にいる実習生数：_____人

実習の前の状況について

- あなたは大学の授業で模擬授業を行いましたか？
a.はい b.いいえ
- あなたが行った模擬授業は、以下のどの項目に属しますか？（複数選択可）

	授業全体	授業の一部分
小学校		
中学校		
高校		
他		

- あなたは実習の前に、以下の項目に対してどのように感じましたか？

	非常に不安	やや	やや	とても安心
教科書内容の理解				
指導案の作成				
授業の実施				
教授中の紀律				
児童生徒との交流				
実習校指導教諭との交流				
即興伴奏				
範唱				
音楽基礎理論の説明				
指揮				
楽器合奏の指導				
課外活動の組織と指導				
課程標準の応用				

- 大学の事前指導は、あなたの不安解消にどの程度役立ったと思いますか？

とても役立った	やや	あまり	まったく役立っていなかった

- 大学の事前指導の内容として、以下のことを希望しますか？

	強く希望する	やや	あまり	まったく希望しない
教育実習目的、重要性、必要性の強化				
実習マニュアルの確認				
児童生徒との関わり方				
過去の実習生授業のビデオ観察と討論				
現職教諭の講演（経験紹介）				

- 実習校の事前指導に参加した回数について、お答えください。

	0回	1回	2回	3回
実習校リーダーの講演				
実習校音楽科に関する説明				
実習校音楽科に関する教学研究会				
師範授業				
師範授業の討論会				

- 実習校の事前指導は実習に役立ったと思いますか？

	とても役立った	やや	あまり	まったく役立たなかった
実習校リーダーの講演				
実習校音楽科に関する説明				
実習校音楽科に関する教学研究会				
師範授業				
師範授業の討論会				

- 授業実習開始前に、模擬授業及びその討論会を行いましたか？

	行った	行わなかった
模擬授業		
討論会		

実習中の状況について

9. あなたは実習において、現職教諭と他の実習生の授業を何時間観察しましたか？

	0時間	1~3	4~6	7~9	10~12	13~15	16時間~
現職教諭							
他の実習生							

10. 以下の項目に関して、現職教諭と他の実習生の授業であなたに強い印象を与えたものにV印をつけて下さい。

現職教師の授業		実習生の授業	
授業の雰囲気		授業の雰囲気	
板書の方法		板書の方法	
間のとり方		間のとり方	
授業の流れ、展開		授業の流れ、展開	
発問の方法		発問の方法	
説明の方法		説明の方法	
時間配分、ペース		時間配分、ペース	
声の大きさ		声の大きさ	
教科書の理解		教科書の理解	
教授の重点		教授の重点	
教授方法		教授方法	
音楽課程標準の応用		音楽課程標準の応用	
伴奏と範唱		伴奏と範唱	
分かりやすい点		分かりにくい点	
教師による授業方法の差		指摘された点	
改善すべき点		教師との差	
児童・生徒の音楽感受力の育成			

11. 授業実習の開始日（初日を1として）。

1日後~	2~	3~	4~	5~	6日~

12. 1日あたり最大の授業時間数。

1時間	2	3	4	5	6時間~

13. 授業実習の総時間数。

0~3時間	4~6	7~9	10~12	13~15	16~18	19時間~

14. 指導案作成の頻度。

実習授業の時だけ	実習授業以外に			作らなかった
	1日ほとんどの時間	1日に数時間	1週間に数時間	
84.9%	0.0%	5.7%	9.4%	0.0%

15. 指導案を作成する際の手がかり。

	よく使用した	ときどき	あまり	まったく使用しなかった
教師用指導書				
音楽課程標準				
専門書				
他人の指導案				
インターネット				
指導教諭の指導				
大学教官の指導				
実習生との話し合い				

16. 1時間の授業の準備時間。

1時間	~2	~3	~4	~5	5時間~

17. 指導案作成の際の指導教諭の指導内容。

	よく指導された	ときどき	あまり	まったく指導されなかった
目標の確認				
重点の確認と解決方法の選択				
児童・生徒の実態の把握				
授業流れの設計				
発問の内容と方法				
指導案の書き方				

18. 自分の授業に対する反省の頻度。

よく反省した	ときどき	あまり	まったく反省しなかった

19. 自分の授業に対する反省の手がかり。

	よく使用した	ときどき	あまり	まったく使用しなかった
指導案の見直し				
児童・生徒の学習成果から				
指導法の改善策を考える				
他人と検討する				
優れた授業を研究する				

20. 実習授業実施後、指導教諭からの指導状況。

よく指導された	ときどき	あまり	まったく指導されなかった

21. 授業実施後の指導内容。

授業展開の方法	
板書の方法	
発問の内容と方法	
児童・生徒への接し方	
授業の目標設定	
言葉づかいや声の大きさ	
教授方法の選択	
CAIを用いた教材の製作	
伴奏と範唱	
音楽の歴史、文化に関する説明の方法	
リトミックの方法	
音楽基礎理論指導の方法	
指揮の方法	
合唱・合奏指導の方法	
音楽課程標準の理解	

22. 指導教諭と大学教官のあなたの実習授業の観察状況。

	よく観察した	ときどき	あまり	まったく観察しなかった
指導教諭				
大学教官				

実習後の状況について

23. 教育実習におけるもっとも重要なことは何だと思いますか？

	非常に重要	やや	あまり	まったく重要ではない
指導教諭の教授へ補助的活動				
授業観察				
教材研究				
授業流れの設計				
指導教諭の指導				
児童・生徒の実態の把握				
授業実施前の模擬練習				
問題点に対する臨機な対処				
授業の反省				
専門書の研究				

24. 実習の効果を高める方法についてお尋ねします。

	非常に効果がある	やや	あまり	まったくない
音楽技能の向上				
教授能力の向上				
音楽課程標準の理解				
音楽教育理論メソッドの学習				
他人の授業を観察する				
自分の授業の反省				
指導教諭との交流				
大学教官との交流				
他の実習生との交流				

25. 実習におけるもっとも難しかったことは？

児童・生徒との交流	
指導教諭との交流	
素晴らしい授業を行うこと	
授業中の管理	
児童・生徒の積極性を引き出すこと	
課外活動の組織と指導	

ご協力、ありがとうございました。